

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

16 母を演じた気のはやいヒツジ

第十六日め（三月三十一日）

きょうも快晴、風のないおだやかな朝。午前七時でマイナス五度。午前八時でプラス五度。急速にあたたまっていく。空から声がきこえる。鳥たちの声だ。モンゴル語で「イトウ」とよばれる鳥の群れ。春めいてきた。

モンゴルには、渡り鳥の到来を春の到来として祝福する風習があった。「ホーライ、ホーライ」と唱和して鳥をまねき、福をよぶ。日本などの南方で越冬していた鳥たちが春にもどる。そうした自然のいとなみを季節のかわりめとして認識し、いわっていた。残念ながら当地では、この風習がすでにうしなわれて久しい。けさの鳥たちは、いわゆる渡り鳥ではない。それでも、春の到来を上げていた。

朝はやくから、ウニナーがトラクターを整備している。きのうは分家がつかった。きょうは本家がつかう。やはり牛糞ひろい。もっとも、ふだんから牛糞ひろいはおこなわれている。二人の嫁たちは、暇をみつけては宿营地付近で日常的にひろいあつめている。それが、宿营地のそうじにもなっている。しかし、宿营地付近にはさほど大量の牛糞はない。宿营地近辺にるのは、搾乳にかかわる母ウシと子ウシだけである。今春のウシの出産予定は、本家と分家をあわせて十七頭だが、すでに出産をおえたのは四頭のみ。これらの母子ウシが出す糞の量はたかがしれている。多くのウシたちは、お気に入り場所



宿営地付近での牛糞ひろい

で自由に草をはんでいる。そういう放牧地へいって牛糞をひろう。集中的に牛糞ひろいをおこなうのである。

きのう分家は西方へすすみ、丘のつくるうねりのあいだにある、円形のくぼみで牛糞をあつめた。きょう本家は南方をめざす。南家の東方にある、デルスの草原で牛糞をあつめる。デルスというのはハネガヤ草で、ススキの原のようなもの。デルスが風よけにもなるので、ウシが好んでゆくらしい。たしかに多くの牛糞がある。ただし、ひろう作業は簡単ではない。デルスがじゃまになる。デルスの草むらと草むらとのあいだでひろう。「サバガ」とよばれる熊手でひろい、「アラガ」とよばれる背におった籠に放り込む。からだの右の方で熊手にひろわれた糞は、もちあげられ、熊手から放り出され、右から左へと頭上をとんで背中の籠にストライク。やや左でひろえば、牛糞は左から右へ小さな放物線をえがいてストライク。

本家の若夫婦とわたしとの三人で、二時間ばかりひろうと、トラクターはもう一杯。ひろってき

た牛糞は、西端にある若夫婦たちのゲルのさらに西方にばらまかれた。ここに「ノロー」すなわち牛糞の「背」をつくる予定だという。午後もう一度、若夫婦はアルガリをひろいにてかける。

この日、ちょっとした事件がもちあがる。

今朝の母子とり作業で、母子群に移籍したのは、五頭のヒツジ。子は六匹いた。あきらかに双子が一緒にいる。母ヒツジの全身の模様を、双子の子ヒツジはどちらもそっくりにうけついでいる。頭部全体がこげ茶色なのだが、頭の頂点だけが白い。ハゲにみえる。子の一方は頭部全体が黒色で、てっぺんはげ。他方は頭部全体が茶色で、てっぺんはげ。これらのほかは母一頭に子一匹であると、だれの目にもそうみえていた。

それらのなかに一匹、腰のたれおちた不細工な子ヒツジがいた。一般に「ハル・フズーテイ」とよばれる模様。「黒首」という意味で、頭部全体が黒いものこと。ウルジーチンゲルの子ヒツジらしかった。そばにいる母ヒツジは「オラーン・フズーテイ」すなわち「赤首」。赤いというのは、ブライトな茶色をさす。母と子は色はちがうが、模様の形はそっくり。それで、ウルジーチンゲルは自分の母ヒツジが出産したのだと思つていう。

「もう、老いたな、十二歳になる」

だから、もう体格の悪い子しか出産できなくなつてゐる、とウルジーチンゲルは判断した。ただすこし奇妙である。母ヒツジの腹はまだ大きい。これからもうまれそうな気配だ。そのことが気になつたウルジーチンゲルは、あとで母ヒツジの尻を確認した。すると、この老いたヒツジはまだ出産してゐなかつた。未産のまま、よその子ヒツジの母を演じていたのである。子ヒツジのそばにあって、子ヒツジのことを気にかけて、子ヒツジからはなれなかつた。それゆゑに牧民はだまされた。子ヒツジだつてだまされた。

こうした現象はしばしば、出産経験の多いメスに見られる、という。自分の出産が近づくと、他のヒツジの子をとってしまうのだそうだ。

この現象は「ホルガシフ」とよばれる。「ホルガ」とは子ヒツジのこと。おなじく「ホルガ」の語から、「ホルガラハ」と派生させれば普通の「子ヒツジをうむ」という意味になる。「ホルガシフ」のほうは、直訳すれば「子ヒツジをうみなれる」というほどの意味。子ヒツジをうみなれたために、よその子ヒツジをとってしまう行動を意味する。ペテランママの、とんだ早とちり。

気のはやい母ヒツジのために、しばらく乳をのむこともなくすごした、あわれな子ヒツジ。腰がたれてからだが小さいのは、双子の片方だったからだ。さっそく母さがしがはじまる。四頭のうちのすでに双子出産であるものを除いた三頭が候補者である。候補者の前に子ヒツジをおいてみる。母ヒツジに匂いがかがせて、拒絶しなかったものが、母というわけ。じつのところ、それが本当の母であるという確証はない。またしても母を演じるだけかもしれない。しかし、それはいっそうにかまわない。乳があり、しかもそれをあたえる気であるのなら、本当かどうかはどうでもいい。それが母というものである。ヒツジの所有権はいわば、産みの親より育ての親にあたえられるというわけ。この子ヒツジを実子とみとめたのはエルデニチメグの所有するヒツジであった。だから、子ヒツジの所有者もエルデニチメグとなった。ヒツジの行動にくわえて、さらにモージも証言する。夜中にみまわったとき、たしかにこの子ヒツジがそのとなりになっていた、と。

かくして一件が落着いたとき、すでに群れ本隊は放牧にでていて姿も見えない。子を取りあげられた未産の母ヒツジは、しかたなく母子群分隊にとどまった。まわりのヒツジはすべて母子のペアだから、ずいぶん肩身のせまい思いをしたかもしれない。

太陽がかなり西にかたむいた頃、午後五時。宿営地の周辺で放牧されていた母子群分隊と、日帰り放

牧からもどってきた群れ本隊とが、およそ百メートルの距離にまで近づいた。そのとき、けさの事件の張本人である偽りの母ヒツジは、メイメイないて分隊から本隊にもどる。母子群から抜けでて、本隊へとみずから走っていったのである。モージいわく、

「当然だ、それが道理さ。自分であやまちに気づいたらしい。出産経験豊富なヒツジは気がはやい。老いたヒツジは他の子でも平気でとる」

母子群分隊と本隊とが合流すると厄介なことになるだろう。子が十分に成育するまでは、ヒツジ・ヤギの群れは母子群と本隊との二つに分割されて放牧することになっている。もし万一ここで両者が合流してしまえば、両者の分割はともむずかしい。モージ母とわたしは、いそいで母子群へむかった。このころになるとわたしも牧畜作業の重要な一員である。二人で、母子群を石垣へと誘導した。それから本隊の周辺にいる、きょう日中に出産した母と子をわけとる作業にとりかかる。対象は二ペア。モージ母さんはわたしに命じた。

「おまえは、あちらを。あれは、子をひろえばちゃんといってくるから。わたしはあちらを」

二人はそれぞれ一对の母子ヒツジを群れからはなすのに成功した。群れは、夕日のはえる斜面でゆっくり草をはみつ、徐々に宿営地へむかっている。それをうしろにして、子ヒツジをおとりに母ヒツジをさきに帰營させ、石垣のなかにいれた。

モージ母さんにかぎらず、牧民たちは個体の性格をはっきり認知している。だから、作業に不慣れなわたしに作業の簡単なほうの個体を指示することができる。去勢オスよりもメスのほうが個体の特徴を認知されやすい。このことは、世界の牧畜民のなかでかならずしもおなじではないようである。

そもそも、群れを形成する大量のヒツジ・ヤギに対して、人びとは均一に個体を認知しているわけではない。百頭以上が常識で、千頭以上の群れもめずらしくない、というモンゴルの群れ。それらは決し



体毛の様相がそっくりな母子

て等しく一様に認知されているわけではない。いつも群れからはぐれやすい個体、後方に逸脱しやすい個体などが特別に記憶されている。人びとは、そういうものを放牧中にときどきチェックして、群れが完全にそろっているか否かを知る。特徴のないものは、その他もろもろとして把握される。

毛色や模様については、区別しようと思えば、すべての個体に対して言及することができる。個体としてよく知っているものについても、あまり知らないものについても区別して表現することができる。モンゴル牧民ならだれでも、その個体をはじめてみる人でも区別できる。モンゴル牧畜文化の共通コードである。そうした区別とは別の次元で、人びとの頭のなかには、個体についての記憶がライフヒストリーとして蓄積されている。とりわけ、出産をめぐる状況は記憶の契機となつて、個体史を形成していく。

まず、出生のときが記憶の契機となりやすい。つぎに、オスなら去勢のとき、屠殺のときが記憶の契機となりやすいが、ライフヒストリーがつく

られるきっかけはむしろ少ないといえよう。これに対してメスは、出産のたびに、ライフヒストリーが記憶されるきっかけをもつことになる。とりわけ、養育技法を洗練させているモンゴルでは、出産を契機とするメス個体についての認識が、去勢オスなどよりも重厚になるのであろう。

ある子ヤギが寝た姿勢で哺乳している。その母ヒツジをみてサラントヤーがいう。

「あー、あの白いヤギも出産したわ。わたしのお気に入りよ。シュドレンの子だったから飼育した。オグジしたので、いつも家のほうへ走ってくるような甘えん坊の子ヤギだった。甘やかされていた。今は少しそうでもなくなった。おとなしくて良い母になった」

群れ本隊のなかにいる「黒ヤギ」とよばれる韋毛のヤギもまた、トヤーのお気に入り。人が群れのほうへ近づくと、たいていの個体は離れようとし、あるいはそっぽをむくものである。ところが、その黒ヤギだけはじつと人のほうを見つめてつたつ。やはり、哺乳びんで飼育されたヤギで、それゆえに、風変わりな行動をとるのであった。

出生のときになにも問題がなければよい。そうすれば、なにも区別されることのない、その他もろもろの部類にはいる。ところが出生時になんらかのトラブルにみまわれた個体は、人の介入をうける。だからこそ、人から特別に記憶され、選択的な愛をそそがれることにもなる。さらにそれが個体の行動特性にむすびついていれば、牧民は常時その特性とともに個体を認識する。このように出生をめぐってエピソードのあった個体は認識されやすいものである。

またより興味深いことに、そうした特定の個体にかぎらず、むしろ非特定の全体にわたって、出産をめぐる状況がよく認識され、かつ記憶されている。出産があるたびに、人びとはその個体の去年の出産状況をわたしに説明してくれる。今年はじめて双子をうんだので子嫌いになってしまったとか、去年は子嫌いだったのにもう良い母になったとか。出産およびその後の状況がしっかり記憶されている。こ

うした状況は、いつもは忘れられているが、出産期になると記憶がよびもとされ、さらに新たな出産が個体史として記憶の層につきかさねられるのである。

ところで、モンゴルの口承文芸では、しばしば孤児が超人的な活躍をする。しばしば盗人として活躍し、死んでも生き返ったりする。孤児の活躍は、子ヒツジたちをみていると自然なことのように思われる。孤児は「オンチン」とよばれる。ダンゼン家で「オンチン」とよばれているのは、あの母をなくした子ヒツジたちである。かれらはもう立派に乳をぬすむ。オンチンゆえに他のものもろからは区別されて認識される。マーキングされているのである。そのことは、長寿をまっとうする可能性をも秘めている。やがて屠殺の時期がきたとき、意図的に除外される可能性が高い。つぎのようなヒツジたちのように。

エルデニ姉さんの養母が所有するヒツジ。そのメスヒツジは、子ヒツジを大切にあつかっている。人が近づくと前足で大地を蹴って子をまもろうとする。首には、色とりどりの小布をつけた首輪をしている。首輪は「セテル」とよばれるもの。聖なる家畜にしたことの印である。エルデニ姉さんいわく、「養母がバヤンツァガン山にささげたのよ。悪天候のときにその山にいのるのよ。このヒツジは孤児だった。母が子嫌いして打ち捨てた。また病気でもあった。だけど、死ななかつた。飼育したのよ。それをセテルにした。こういうのは、死ぬなら死ねって感じで、育てば家畜になる。運よく家畜になったので、セテルにしたんだろう」

ウルジーチンゲルがセテルにしたヒツジは、模様でいうなら「ハル・ハルザン」つまり黒はげ。「ブドゥーン・エル・ホニ」つまりふとった去勢オスヒツジ。これについてウジチャイわく、

「一九七七年のゾドまでふとって去勢オスのようなメスがいた。そのふとい尾はあがらない。だか

らオスがすわらない。妊娠することがなかった。近所でも評判だった。ところが雪害で痩せて、はじめて妊娠した。七九年にオスとメスの双子を出産した。なにしろ出産経験がないので子の面倒をみない。足で蹴ったりして。そのメスヒツジは、その後またふとり、もう二度と妊娠することなく死んだ。唯一度の出産でうまれたオスの子ヒツジは、いま九歳。首輪をつけてはいないけれど、殺さずにある」

条件の悪いものに対しては、一方で草原のきびしい掟がある。しかし他方で、この悪条件をみごとに克服したものは尊敬される。ある種の超自然的な力や、絶対者の寵愛が感じられるのかもしれない。そして、聖別されることになる。あの雪害の生き残り、老白牛もまた聖別された。やがて、わたしも一頭のヒツジをゆずりうけ、それを聖別することになる。ゆずりうけるにふさわしい個体史をもつヒツジ、個体としてきわだって記憶されているヒツジを。